

チェルノブイリの子どもたち



チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 85 2011年6月18日発行
郵便振替口座 「チェルノブイリ子ども基金」 00160-4-98316



チェルノブイリ25年 フクシマ元年

最新現地報告 広河隆一

4/23 牛込筆筈区民ホール

当日のアンケートから
福島原発のさなか、とにかく広河さんのお話を伺うことがもっとも真実に近づけると思いかけつきました。予想以上の現実には胸が重くなりました。この会を企画してくださいました事に深く感謝いたします。合唱隊の方達、クミコさん、花田さん皆さん大変素晴らしく心にしみわたりました。ありがとうございました。(60代 女性)

「ふるさと」を会場のみなさんと一緒に
歌う荒川少年少女合唱隊とクミコさん



広河隆一著『暴走する
原発』～チェルノブイ
リから福島へこれから
起こる本当のこと

発売と同時に売り切れた、
今、話題の本です。事務局
でも取扱中。詳しくは「事
務局から」をご覧ください。



家族の保養 in ベラルーシ (5月
10日～21日まで 8家族18人
参加 本文12ページ参照)

チェルノブイリ 25 周年 救援キャンペーン

4/23 牛込筆筈区民ホール&4/14~26 チェルノブイリ・福島写真展 【報告】

チェルノブイリ 25 年 命・自然と題して行われた今年のチェルノブイリ 25 年目の最新報告は、残念ながらフクシマ元年の報告にもなってしまいました。

当初の計画では、広河さんの最新報告とチャリティコンサートと半々の感じで進めていましたが、広河さんの報告に期待を寄せる人たちからの問い合わせが続き、数日前には完売を予感させました。

しかし、例年、当日券を発行していますので、それをあてにして来られる方もいらっしゃる、まったく出さないわけにもいきません。

当日は入れない人が続出しましたが、ロビーでテレビ観賞していただくことができました。また、後半からは若い人たちに立ってもらったり、みなさまのご協力の甲斐があり、混乱せずに会を終えることができました。

次ページのアンケートをごらんいただくとおわかりのように、広河さんの話をもっと聞きたかったという声が多数寄せられました。

また、チャリティコンサートにも賞賛する声が多く、荒川少年少女合唱隊のかわいらしさと訓練された歌唱力、「祈り」1 曲にもかかわらず、強烈な印象を与えたクミコさん、胸に響いた花田さんの「チェルノブイリ鎮魂曲」、それぞれの共演者に惜しめない拍手がおくられました。

初めて参加、という方が多くいらっしゃって福島原発の事故後、原発、放射能に対する関心の高さがうかがわれました。

本当のことを知りたいという人たちに確実な

メッセージを与えたと思います。

////*****////////*****////////*****////

早稲田奉仕園スコットギャラリーで行われた「広河隆一写真展」。改装されたばかりのギャラリーでしたが、クラシカルな雰囲気が漂うすてきな会場でした。今回は会場側のご厚意により、例年の写真展と違って、長期間開催できました。場所は繁華街にあるわけではなく、ふらりといらっしゃるお客さんは望めませんでしたが、その代わり、この写真展を見たい、という思いの強いお客様が多かったと思います。

そして、若い人の姿が目立ちました。チェルノブイリとフクシマの写真に、みなさん声もなく見入る、という感じでした。

開催が長期にわたったことと、閲覧コーナーを設けたため、じっくり腰を据えて資料類も見られる方々。ボランティアの稲葉さんによる語り「チェルノブイリの祈り」にも多くのみなさんが参加されていました。チェルノブイリの写真の前で語ることが一番この本にふさわしいと言われる稲葉さん。ゆっくりと情景を聞く人たちにイメージさせる力をお持ちでした。

今年、特徴的だったのは広河さんの本を求める人が多かったことです。見本として見てもらうことはできましたが、チェルノブイリ関連の書籍はほとんどが絶版状態で期待に応えられない点もあり、残念でした。『チェルノブイリの真実』をもとに新たに出版された『暴走する原発』が好評です。この後も絶版の本が復刊、あるいは新刊されることを祈っています。



2011 年 2 月撮影 ウクライナ



2011 年 3 月撮影 福島

1986年4月26日に発生したチェルノブイリ原発事故。事故で亡くなった人々や、事故後、病や世間の偏見などさまざまな苦難と戦い続けて来たウクライナやベラルーシの人々の姿から、私たちは一体何を学んできたのでしょうか？私たちはこれまで、彼らの体験を伝え、救援するというだけでなく、私たち自身の問題としてこの事故について学び考える場としてもこの救援企画を実施してきました。事故から25年目となる今年、“私たちのような子どもを増やさないで！”と言ったチェルノブイリの“子どもたちの願いに応えるために”、今一度、この25年間のチェルノブイリを振り返る企画を催したいと考えていました。

いよいよ準備も佳境に入ってきた3月11日、東日本大震災が起これ、直後から、福島第一原子力発電所の事故が報道されました。ついに起きてしまった！そんな気持ちでした。そんな中迎えたこの企画には、講演会、写真展を通じてこれまでに無い本当にたくさんの方が来場されました。

さまざまな情報が流れ、確かな情報が求められる中、講演会では、広河隆一氏、神野英樹氏、そして急きょ参加して下さった河田昌東氏という3氏を迎えることが出来たことは大変素晴らしい事でした。それぞれの立場からチェルノブイリ、そして福島を見て語られた言葉には、事故の重大さとそして確かな情報と培ってきた経験こそが大切であることを教えてくれました。

また、チェルノブイリ25年の軌跡と題した広河氏の写真展では、事故から25年間を追うとともに、フクシマ0年の写真がまさにチェルノブイリと重なって見えてくる写真展となりました。ぐらりと1周会場を回った最後に展示されていたフクシマは、まさに25年前のチェルノブイリの姿だったのです。

アンケートには、来場された人々の切実な思いが語られていました。地震、津波という天災に加えて起きてしまったこの原発震災。私たちは、あのチェルノブイリの子どもたちの願いに応えることが出来ませんでした。しかし、この先、少しでも子どもたちの願いに応えられること、私たちがすべきこと、をしなければいけないと感じています。チェルノブイリの、そしてフクシマの子どもたちの願いに応えるために、今、全力を尽くさねばならないと思っています。

4.23 筆筒区民ホールイベントに参加

私は今回イベントにボランティアとして参加するのが初めてでしたが、お手伝いできてよかった。まず、何より、たくさんのお客様に来ていただけてよかった。関心の高い時期に開催されたので、皆さんの期待値も高かったと思いますが、中身が濃く、その期待にこたえ、皆さん本当に満足して帰られたのではと思います。私の持ち場の隣では、Days Japanが飛ぶように売れ、売り切れてからはDays Japanがないのなら広河さんの写真をとカレンダーのバックナンバーが結構売れました。また、最後私はお客様からよく見える位置に募金箱を持って立っていたので、たくさんのお客様が突進するように私のほうに向かってきて募金をしてくださいました。割合としてはアンケートを投函された人は少ないように感じましたが（※）、上記のように、私の場所ではお客様の感動がすごく伝わってきました。個人的には広河さんのお話や、ピアノ、かわいい合唱は期待通りにすばらしかったですが、クミコさんの歌は一曲だけどすごい迫力で驚きました。（ボランティア／S・I）
※アンケート回収は例年より高い数字でした。

===== ★ ===== ☆ ===== ★ =====
〔会場でのアンケートから〕

○政府の御用学者の言っている事があてにならないということが改めてよく分かりました。来た目的は主に講演を聴くためではありましたが歌や演奏もよかったです。（40代 男性）

○子ども達が音楽と楽しみながらチェルノブイリ（今後はフクシマ）を学ぶ、知ることはとても大切と感じた。（50代 女性）

○ありがとうございました。東京都の小学校の教員です。福島より一人の転入生が私の学級に入りました。彼女に対する心が定まりました。また私の教えた児童が合唱隊で活躍しています。心を育てること大切にしたいと思いました。（50代 女性）

○全く初めて考えた。すぐに何と言えば、来て良かったです。（30代 女性）

○チェルノブイリの子どもたちが、今、日本を応援しているということを聞いて、なんとも胸が痛くなりました。（20代 女性）

チェルノブイリ 25 年、フクシマ元年

最新現地報告 広河 隆一

2 月にテレビの取材でチェルノブイリに 行ってい

ました。チェルノブイリ子ども基金が勘定したら、私は 50 回以上チェルノブイリに 行っているそうです。まさかこういう事態になるとは思ってもいませんでした。

日本に帰ってきて、その取材映像を編集している最中にこの福島原発事故が起きました。テレビ局は、そのチェルノブイリで取材した内 容があまりに生々しく、それをそのまま放映するのは憚られるという判断をし、本来ならば明日 (4/24) 放映の予定でしたが、中止になりました。

中止と判断されたあの時期、フクシマの原発 事故とチェルノブイリを重ねることはタブーのような扱いでした。チェルノブイリを引き合いに出すことは危険をあおり立てることであるといった雰囲気 で、「チェルノブイリ」という言葉 を使うこと自体を自主規制するというような感じでした。

ところが状況はそれを追い抜き、いまやチェルノブイリと同じ等級の問題になっています。しかし、レベル 7——チェルノブイリと同レベルの世界最大級の事故が日本で起こっていることについて説明する科学者たちは、チェルノブイリとは違う、放出された放射能の量はチェルノブイリの 10 分の 1 であるなどと一生懸命言っ ています。科学者がチェルノブイリより少ないから安全と言っているのだから、テレビがそう言っているのだから安全なんだろうと私たちは刷り込まれ、慣らされる。これはとても危険な ことだと思います。

私はむしろ、チェルノブイリの 10 分の 1 なんだ！ それは大変じゃないかという気持ちのほうが大きいです。あの広大な範囲を汚染した放射能の 10 分の 1 の量、しかもそれは現在進行中でどう落착くかわからない。チェルノブイリ 事故で放出された放射能の量は、広島型原爆の少なくとも 500 個分、学者によっては 1000 個分 という計算もあります。では 10 分の 1 って何ですか？ すでに広島型

原爆の 50 個分の放射能が 出ているということなんです。

そのように危機的に考える訓練をしないと、私たちはまるめこまれる。本当はもう少し丁寧な言い方をしたいのですが、あまりにいろいろ な言葉が使われすぎ——「万全を尽くす」「直ちに影響はない」といった言葉がおうむ返しに され、そして、そのために学者たちが動員されています。

日本はヒロシマとナガサキを経験したということとで、海外では被害者の目で見られていました。ところが、あるときからそれが変わったんですね。スリーマイル島原発事故のあと、スリーマイル島周辺のガンの発症率は アメリカ全体の発症率と同じだから心配する必要はないと言ったのは日本の学者です。そして、その見解を取り入れたアメリカ政府は、もうこれ以上対応しなくて良いという判断をし、周辺 住民たちはものすごい絶望感にとらわれた。そういう役割を日本人はしてしまっているのです。

うしろにヒロシマ、ナガサキがあるからこの 人たちは専門家だと、海外では思われる。チェルノブイリの場合でも、これは食べても大丈夫、この水を飲んでも大丈夫、子どもたちの病気も多くは発生しないと 言ったのは、広島から行っ た学者です。日本人は、日本の学者たちが何をしているかをあまり知らないまま、手を貸して しまっているんです。

いま、原子力は安全なんだ、事故だ事故だと騒いでいるけれども、レベルの低い問題なんだと、一生懸命繰り返しています。残念ながら、人間の命より大事なものがあるんですね。原子力産業の利益です。それは日本一国だけの問題で はなく、世界中の原子力産業が、この福島の事故を小さく見せなければなら ないと考え、そして電力会社も事故を低いものだと見せようとした。そして、信じた

くない政府もあった。1年くらい前でしょうか。私は民主党政権に対して、「朝日新聞」の「声」欄に投書したことがあります。私たちは民主党政権にいろいろなことを期待しています。しかし、原子力発電を推進するという立場を最初から明確にするようなことは撤回してほしいと。

多くの人たちがいろいろな警告をしてきました。地震が起きれば必ず津波が来る、原子力発電所はたいへんなことになる。多くの学者たちや多くの人々、また海のそばに住んでいる人たち、昔の言い伝えを聞いている人たちにとっては想定内の問題だったんです。それに耳を傾けようとしない人たちにとっては想定外だっただけのことなのです。私たちは、いままでと同じようなやり方をしているもうダメだと思います。そんななかで何を選択しなければならぬかを、写真を見ながら考えてみたいと思います。

主に昔撮影したチェルノブイリの写真ですが、いま見ると見方が変わってきます。いま、私がチェルノブイリについて一番最初に書いた岩波新書の『チェルノブイリ報告』を読み直していますが、いまのことをそのまま言われているみたいです。それから東海村でも、中性子による被ばくを避けるため、大勢の住民が避難するといったJCO臨界事故が起きました。あのときに避難した人たちが言っていた言葉、警告していたこともまったく同じです。

同じ間違いを同じように繰り返しながら、なかったことにしている。そのようなこの国の生き方なのか、私たちの考え方、そこから直していかなければならないと思います。

こういうタイトルをつけなければならなかったことが残念です。「チェルノブイリ 25 年、フクシマゼロ年」。チェルノブイリ原発から 4 キロ離れたところにお墓があります。

福島へは 3 月 11 日に地震が起こった翌朝に家を出て向かいましたが、道路が大渋滞し、また随所に亀裂が入っていたりと、いろいろあって、郡山に着いたのが夜でした。そして 13 日の朝すぐに双葉

町に向かい、役場と双葉厚生病院に行きました。そこから福島第一原発までの距離は 3 キロですから、ここよりもさらに原発に近いところですね。

チェルノブイリ原発から 4 キロのこのお墓は汚染がひどく、お墓参りは年に 1 度、約 2 時間許可されているだけです。日本では 20 キロ圏が立ち入り禁止区域となりましたが、チェルノブイリではもちろん、30 キロ圏内へは特別な許可書がなければ入れません。

双葉町に行った時の話を少しします。国道 288 号線という道路が、郡山の方からまっすぐ海の方へ伸びています。その突き当たりには双葉町の中心街があり、役場などがあります。12 日に 20 キロ圏の立ち入り禁止が実施されて人々が避難したので、20 キロ圏の入り口には検問所があると思っていました。だから、検問所を無理して柵を越えて中に入ることはしないようにしよう、だけど、どんなふうに検問しているのか、それを知りたいと思って双葉町方面に向かいました。

ところが、検問所がなかったんです。そのまま進んでいった。その途中、いろいろなところで放射線検知器を車外に出して値を計りながら行ったのですが、針がどんどんあがっていく。私が持っていた放射線検知器は 100 マイクロシーベルトまで計れるものなのですが、それがあっという間に振り切れた。チェルノブイリに行った 50 回のなかで、自分の放射線検知器が振り切れた体験というのはほとんどありません。

それが今回、双葉町で振り切れた。最初は自分の機械が壊れたのかと思いました。他に 2 人が機械を持っていたが、いずれも振り切れた。そのうちの 1 台は 1000 マイクロシーベルトまで計れる機械でしたが、それも振り切れてしまいました。

私たちはどうしたらいいのかわかりませんでした。これ以上進んだとしても、どれだけ危険な状態になっているのかわからない。政府は万が一のことを考えての避難だと言い、放射能の数値も発表しない。

そんなに危険な状態だったら検問所を作らなければならないのにそれもない。政府はあそこ、と

にかく、「安全」「安全」と言うだけで数字を発表しませんでした。するにしても1日に1回、数値が上がった時ではなく、落ち着いた時にだけ発表するというやり方でした。

そんななか、原発周辺がそういう危険な状態にあることを知らずに入ってくる人たちがかなりいました。私たちは見つけられる限りの人たちを呼び止めて、いまこれだけ状態が悪いからすぐに引き返したほうが良いと伝えました。そして私たちも幹線を取りながら、反対方向から双葉町に向かうとしている車を全部止めて数値を示し、いまは非常に危険な状態にある、いまは入らない方が良いと説明しました。

ある人はペットに餌をやりに行かなければならない、ある人は花の栽培をしているので水をやらないと枯れてしまうと。またある人は、とにかくすぐに出ろと言われたので何も持って出なかった、ポケットに4000円しか入っていなかった。そんな状態で避難していました。そういった人たちが、預金通帳などの大事なものを取りに自宅へ戻ったりしていました。いつその危険な状態が収まるのか私たちにはわからなかったけれど、とにかくいまはやめたほうが良いと言いました。

子ども連れの人もいたので、車を止めて事情を話したら、彼らは双葉町に行くのではなく、その手前を右に曲がって川内村というところに行くと言います。そこには避難所があって、大勢の子どもたちがいると。だからそこまで山の中を車で30～40分ついて行き、村長に会って言いました。「ものすごく放射能の数値が上がっています。だからあちら（双葉町の方）に行く人は止めてください」「それから子どもさんと妊婦の人は、できるだけここから出た方がよい」そういうふうな。2～3日後、川内村は自主避難をしたという記事が新聞に載っていました。残っている人もまだいるようですが、大半は逃げたということで、それは良かったと思っています。

1回目はそんな状況でした。翌13日は宮城県で津波被害を取材し、14日の朝、岩手県の方へ向か

おうとしていたのですが、別の水素爆発が起きたので、あわてて福島に戻りました。南相馬という海岸沿いの町から順番に計りながら原発に近づこうとしたのですが、道が津波で封鎖されて通れず、郡山方面へ向かいました。途中はそんなに放射能の値は高くはなかったので、こっちのほうに風が吹いて来なくて良かったと思っていたんです。

そして伊達市の一番南端、飯舘村との町境に十字路があるのですが、その食料品屋で買い物をし、食事をしました。そして念のため検知器のスイッチを入れたんです。そうしたら、ものすごい勢いで数値が上がっていきそうですね。誰もそんなことは知らない。ここまでの道は大丈夫だったのに、まさかこんな所で急に値が上がるとはと、ビックリしてしまいました。

念のため、そこから飯舘村に入ってもう一度測ったら、針は振り切れてしまった。後で聞いたら、風が飯舘村のある方向へ流れて放射能が落ちたということでした。たいへんな状況になり、飯舘村はいま計画避難区域に指定されました。

その取材の最後に、現場ではどういう人たちがどういう形で作業にあたっているのかが気になったので、福島第一原発の正門の辺りまで行きました。テレビでご存知の白い服とガスマスクのようなものを皆が身につけているのですが、私はあの服がほとんど何の役にも立たないということを知っています。

昔、チェルノブイリの事故処理にあたった消防隊の隊長に会って話を聞いたことがあります。彼に、「今度、原発で火事が起こったら、あなたは部下に消火に行きなさいと命令できますか」とたずねました。すると彼は、「いえ、それはできません」と答えました。

でも、チェルノブイリ事故が起きた頃は防護服がなかったし、いまは世界中で最新鋭の防護服が開発されているから大丈夫なのではないですかと言ったら、「世界中に放射能の防護服なんてものは1着もないんです。私たちが防護服だと思っているものは防塵服なんです。ガスや埃の形で身体に沈着したり、身体の中に取り込まないためのものであつ

て、ガンマ線は簡単に服 地を貫いてしまうので何の役にも立たないのです」そう言っていました。

私はそれが信じられなかったので、日本に 帰ってから関西電力の原発が多数並ぶ若狭湾に行きました。そこで一番大きな消防署、敦賀消 防署を訪ね、事故が起きたらどうするのかと聞きました。署長は、これを着るんですと言って 服を見せてくれました。それで私は「これで安全なのですか？」と聞きました。そうしたら、消 防署の署長も知っていたんですね、「いや、これは放射能には役に立たないのです。ガンマ線に はまったく役に立たない」、そう言いました。

つまり、自分の身体を守る術などほとんどないままに原発というのは造られていった。いったん事故が起こったら身を守る方 法はない。すごい厚みのある鉛なら遮ることはできるかもしれないけど、そんなものを身に着 けて動き回ることではできませんから、いまのところはロボットに頼る。しかし、チェルノブイ リ事故のときもたくさんのロボットを頼りましたが、結局は全部壊れてしまいました。それ以 来、監視用にはロボットを使っていますが、作業用にはほとんど役に立たないわけです。

2 回目に行ったときに撮影した福島第一原発の写真です。真ん中に煙突があって、右に壊れかけたものがありますが、4号機で しょうか。2キロから1.5キロくらい離れた場所です。

チェルノブイリ原発のそばで、車両の放射能 を計って検査している様子ですが、同じことが現在、郡山市や福島市、二本松市でも行われて います。

4 キロくらい離れたところから見たチェルノブイリ原発です。原発とここの間に生えていた松の木（松林）は、汚染されすぎ たので埋められてしまいました。

チェルノブイリ原発の3号炉は事故のあともしばらく運転していました。4号炉で爆発があったのですが、その隣の3号炉はしばらくの 間動かしていた。とにかく原発を動かしてお金にしなくてはいけない、そういう判断があった わけです。原発は停

止してから大量の崩壊熱を出し続けますので、止めた後も監視が必要です。 今度の福島でも、それを管理しなければならないわけです。その監視要員として人がいます。

政 府の公報などでは、チェルノブイリ事故ではわずかのしか死ななかった、30 数人プラス 15 人の子どもたちが亡くなった —— そのように言っています。たった 40 人や 50 人、本当にそうなのでしょうか。例えば、彼は 原発の元事故処理をしばらくしていた人ですが、彼の事故処理班のチームには 7 人がいて、彼と もう一人を除く 5 人はすでに 40 代の後半から 50 代の初めに亡くなりました。もう一人は怖いか らとどこかに逃げてしまっていて、その後のことはわからない。

原発事故で何人死んだかという数字を、本当 に少なく少なく見せようとするのが IAEA（国際原子力機関）など。WHO（世界保健機関）もそれ に参加して、とにかく被害者を少なく見せようとする力が働きます。今回の日本でもそうです ね、どこかで原子力産業に関わった学者や医者、被害を少なく見せるために発言したりしま す。

チェルノブイリ原発から約 17 キロ離れたところ に病院があります。この病院に勤める看護師や医者 に集まってもらい話を聞きました。こ こ で働くためには健康調査をして、絶対的に健康であるという結果が必要だそうです。問題のない人だけが働きに来ると彼らは言います。それで私はたずねました。それではあなた方みなさん健康なのですか？ そうしたらみんな首を振りました。

何 かしら病気を持っている人は手をあげてくださいと言うと、全員が手をあげたんですね。彼らはここで 2 週間働いて、2 週間 は遠く 100 キロ離れた町で休むことができます。そういった勤務条件や給料が少し良いという理 由からこの病院を選んでくるのですが、その代わりに自らの健康を売り渡してしまっているの です。

プリピャチの町は死の町になってしまいました。

日本政府が発表した学校活動での放射線量の安全基準にビックリして、プリピャチを思い出しました。福島県の学校などで、子どもが運動場で遊んで良い、平常通り登校しなさいとする数値は、1時間あたり3.8マイクロシーベルトという数字。ここプリピャチの数値は4マイクロシーベルト毎時です。プリピャチとほとんど同じような数値の所で、子どもたちが駆け回って構わない、そういうことを日本では決めようとしている。本当にビックリしてしまいました。

放射能の場合、危険なものを安全にするという方法はほとんどありません。しかし彼らは、その方法の一つだけ持っています、私たちにはないけど。それは、「危険だ」というものは「安全だ」にしていれば良いということです。例えば今、50マイクロシーベルト毎時が「危険」であるのなら、100マイクロシーベルト毎時までを「安全」に変えていけばいいじゃないかと。数字を変えていけば全部が安全になってしまうのです。

数字のことは難しくて、私たちにはその意味がよくわからない。でも、はっきりしているのは、4マイクロシーベルト毎時はここプリピャチの数字で、40マイクロシーベルト毎時がチェルノブイリ原発そばの値だということ。それは私の頭に入っています。このプリピャチのようなところに学校があって、子どもたちが遊び回って構わないのか？

チェルノブイリでは、汚染された村々の道はすべてアスファルトで舗装されました。埃が身体の中に入ったら致命的だからです。では、福島の学校の庭をアスファルトで固め、除染として、毎日水でそこを洗い流すようなことをするのか？それでもなくても、国は1メートルの高さのところで放射線を計っている。幼稚園の場合は50センチ。地面はさらにレベルが高いのです。子どもたちはそこでひっくり返ることも禁止されるわけです。「転げると危険」と、どこかに書くのでしょうか？もうめっちゃくちゃです。とにかく安全に見せようとして、めっちゃくちゃなことを決めていく。どこでも安全に

してしまえとしているので、福島はパニックになっています。

政府を信じるしかないじゃないか、他にどうすれば良いのかといった言い方をする人がいますが、それでここまで私たちはきてしまったのです。本当に、別の選択をしなくてはいけない。要求とか請願とかをやっている時期ではないと思います。いますで福島県から6000人、8000人の子どもたちが逃げているという話を聞きましたが、それは当然だと思います。

プリピャチの観覧車は回ることのないまま、子どもたちが遊ばないまま放置されました。

病院も、25年たってしまったらこんなふうになってしまっています。20キロ圏内のすべてがこうなってしまうとは思いません。しかしチェルノブイリでは、円を描くような形で、北の方は原発から45キロ圏ぐらいが閉鎖地域となり、鉄条網が張り巡らされています。飯舘村の方ではもっと放射能値が上がっています。立ち入り禁止の状態がいつまで続くのかわかりませんが、除染作業というのはたいていへんな作業です。

なぜ鉄条網で囲まなくてはならないか、それはもちろん外から人、泥棒が入る可能性が非常に大きいからです。チェルノブイリの場合も、泥棒が放射能で汚染された家財や電化製品を盗み出し、町で売りさばくということが起きました。他にも、中にいる汚染された動物が外に出ないようにするといった目的もあります。牛や馬、犬などは、人間がいる方向に向うでしょう。柵の外に出たら、それはもう汚染されたものとしか見られない。鳥はどうしようもないですね。

日本でも消火にヘリコプターが使われましたが、チェルノブイリ原発の火災を消すために使われたヘリコプターは残骸となって集められています。放射能で汚染されて危険すぎて使えなくなってしまったので、これから裁断されて地下に埋められるということです。同じく、避難用に使ったバスも残骸となっています。

福

島の避難指示は、明らかに政府、保安院、東京電力、すべてが間違っただけだと思います。事故が起きてすぐにやらなくてはならなかったのは、万が一のことを考えるということです。一番最悪の事態を考えて行動すること、それが危機管理です。それを怠った。これで大丈夫だろうと、最初に政府がとった措置は3キロ圏の住民の避難指示でした。そして、10キロ、20キロと拡大していきましたが、10キロ、20キロの指示が出るまでには時間がかかりました。とにかく子どもと女性、とくに妊婦はそこからすぐに逃がして、50キロ、100キロ離れた安全な所の国民宿舎などを全部借り上げて、開放しなくてはならなかったのです。

プリピャチの場合は、事故の翌日に1000台から2000台のバスがアパートに横付けされて住民全員が連れ出されました。「2〜3日で帰れますよ」と言ったのは、旧ソ連も日本も一緒です。そうでなければ、住民は一生自分の家に戻れなくなるかもしれないと思って、1時間や2時間で準備ができるわけがありませんから。福島でも、避難所に逃げてきている人たちは本当に怒っています。あんな形で追出して、ポケットに数千円しかないような状況に追い込まれた。そしていま、中に入ったら罰則が適用される。そんなことになっているのです。

私

が双葉町に行った時、放射能の数値が上がっているから封鎖しなくてはならない状態でしたが、放射能は海の方に流れていました。今日は雨が降っていますね、今日の風はどちらから吹いているか皆さんご存知ですか？ これからはそういうことを毎日毎日気にしなくてはならなくなります。3日ごとに更新されるドイツ気象庁の予想図では、風は北の方向、東北被災地の方に吹いています。そして、やがそれが円を描きながら本州のほうに近寄ってくる、と予測されています。DAYS JAPAN 電子版の原発情報欄の下に、3日ごとに更新される予測図がありますので参考にしてください。単に予測から作った図ですので、放射能を含んだ風（雲）はその通りに流れるわけではありませんが、参考になるとは思います。

汚

染された村に残された家は家の中の物が盗み出されないように壊して埋められました。屋根のスレートまでが盗み出して売られました。また、火災が起きると煙の中に放射能は凝縮されますので、凝縮された放射能が拡散しないように埋める作業が続けられました。が、それも途中でお金が尽きてやめました。

チ

ェルノブイリ30キロ圏の検問所では、圏内から出るときに車両の検査をします。日本とまったく一緒に、日本では検査官は白い服を着ています。放射能の値が高かったら、もう一度水で全部洗浄し直してから圏外に出ます。

チェルノブイリ事故の被災者たちは、被災者の団地に移り住みました。事故が起きたときにキエフで大規模団地が建設中で、そこに入居する人たちも決まっていたのですが、それを中止して避難民を受け入れました。プリピャチには事故当時、5万から5万5000人の人が住んでいたと言われていますが、その大部分がこの地区に避難してきたといえます。

こ

れは、旧ソ連の権力が強かったころにはできたことでした。日本もすぐに新しい家を用意しなくてはなりません。1年や2年で使わなくなってもいい、安全になったら戻ってもいい。とにかく女性や子どもたち全員が安全な場所に避難することが必要です。やらなきゃいけない。こういう部門では、日本は旧ソ連よりはるかに遅れています。

チェルノブイリの事故の後、最初のころに亡くなった30〜31人の方たちのお墓があります。最初は土に埋葬されていましたが、土だと降った雨が遺体を伝って地下水に入り、地下水から汚染が広がり危険だということで掘り起こされました。この2月に行った時には、コンクリート詰めにして安全に処置され、きれいなコーナーになっていました。

放

射能が通った、雨が降った跡です。その家の中の様子です。汚染された村では多くの家は埋めら

れ、看板 が立てられました。かつてここには〇〇村があったと示されています。

これから日本で問題になってくるのは、情報を隠したということです。パニックを恐れるあまりと言いますが、そのために情報を知らせず被曝者を、病気の人を多く作っていったい何になるのでしょうか。

最初のころは放射能の数値が上がっても公表しませんでしたので、大勢の人たちが相当量の被曝をさせられたはずです。チェルノブイリの場合は、そういった、かつて被曝した可能性のある人たち、そしてそういう人たち から産まれた子どもたちの情報が管理されています。各地区の病院には、その地区に住む被災者のカルテだけを集めたコーナーがあり、そのカルテは親の代から受け継がれ、もし何か身体に異変が起こった場合には薬の処方や医療が対応できるようになっています。

福島の場合も、人々は各地に散らばっていきますから、プライバシーをきちんと守りながら、その人たちが必要な医療がすぐに求められるような体制を作らなくてはなりません。

しかしいま、福島で被曝した可能性のある人たちを追跡調査しようという運動が日本の学者たちの間にありますが、あの人たちがやるのならそれもまた危険という感じがしています。

昔、ABCC（原爆傷害調査委員会）という団体がありました。原爆を投下したアメリカが広島に作った機関で、被爆者たちをモルモット代わりにとにかく検査する。検査をするけれど治療はしない。治療してしまったら、放射能がどのように人体に影響するのか経過を観られないからです。その検査結果は核爆弾開発に利用するため、放射能にはどういった威力があるのかを調べるためにでした。ABCCは放射線影響研究所と名前を変えて、いまでも続いています。広島の学者たちも協力するといった記事が載っていました。広島の医者は、「自分たちの経験を生かして、人々のためにやろうとしている」とコメントしていましたが、非常に腹が立ちます。その放影研の元理事長は、IAEA 事故調査委員長としてチェルノブイリ事故による人体への影響は一切心

配ない、子どもたちの病気が増えることはない、食べ物は何を食べても大丈夫と宣言した人間です。ちなみに彼は、水俣病はチッソと関係がありません。広島の黒い雨と人体の影響はありません、そう言っていた人物です。

レントゲンというのは放射線を当てることでフィルムに感光するのですが、チェルノブイリ事故で亡くなった人の遺体から肺を薄く切り取って、レントゲンのフィルムの上に置いておくとポツポツと光が出てきます。これはプルトニウムです。いま学者たちは、プルトニウムが福島原発の外で検出されたとしても、それは微量だから身体に影響はないと言い、しかも重いから外に飛んでいかないなどと言っています。私はチェルノブイリで発表されたプルトニウムの汚染地図を持っていますが、それを見ると30キロをはるかに超えたところまでプルトニウムは飛んでいっていることが明らかです。

「直ちに健康被害はありません」という言葉への回答。直ちに影響が出ることを急性放射線障害と言います。そしてすぐに亡くなる人のことです。チェルノブイリ事故で最初に亡くなった30数人は急性放射線障害でした。彼ら以外に死者はいないというようなことが言われていますが、放射能の影響は時限爆弾のように何年もたってから現れます。

症状が出たときには素早くスクリーニングをしないとではなりません。早期発見をして手術をしたら治る。治らなくても進行はストップできます。その後は、毎日薬を飲み続けなければなりません、それを放っておいたらどうなるか。喉にあったガンは体中に転移していきます。そして、脳にきたときには死んでしまいます。

手術する女の子、事故から10年目くらいに病気になるしました。

事故の時はお母さんのお腹の中にいた女の子は、それから20年くらい経って体中いろいろな病気に冒されています。事故の時に子どもだった人たちが母親になっていっています。彼女たちが子どもを産むことに対して非常な不安を抱える状況、それが現在のチェルノブイリ被災地です。

甲状腺の手術をした後も、毎年、CT スキャンで体中のガンの転移を調べる検査をしています。

先日、9人の母親の母乳を検査したところ、4人の母乳から放射性ヨウ素が検出されたと発表されました。国は、微量だから大丈夫だ、1週間くらい粉ミルクを飲ませて、また母乳に戻せば大丈夫だなどと完全に人事のように言っています。

チェルノブイリの場合は1回の爆発で大量の放射能が外に飛び散ったが、福島はその10分の1の量だから大丈夫などと言いますが、福島は進行中の事故です。しかも4つも原発がある。悪く進んだら、他の2つ（2、4号機）も爆発するかもしれないという恐ろしい状態にあります。その度に爆発の種類は違うわけです。一番出るのは放射性ヨウ素だから、1回限りの排出だから大丈夫などと彼らは言いますが、そうではありません。しかも、他の形で、野菜からかもわからない、水からかもしれない、いろいろな形で身体の中に取り入れていくわけです。チェルノブイリの事故から5～6年目、80人のベラルーシの母親の母乳を検査したら、もう直接的なものはなかったはずなのに、母乳から放射性物質が出てきました。今度はセシウムです。ストロンチウムも出たと言います。プルトニウムは計れなかったと言います、でも入っているはずですよ。

20年たっても亡くなっていく人はいまだにいます。原発のそばで放射線検知器で計る女性は、この写真をとった後2年目ぐらいで亡くなりました。女の子は甲状腺ガンが脳に転移して、写真を撮って2か月目に亡くなりました。

チェルノブイリ事故で使われていた放射線防護服と言われるものは、鉛の薄い板を身体にあてているだけで、こんなものではとてもダメでした。でも、これでも日本の白い服よりははまだましです。日本の原発地帯に用意してある防護服ではガンマ線はまったく防げないと言います。

昔、チェルノブイリの子どもたちが壁に貼っていた絵。日本から折り鶴が飛んで来て、自分たちを助けてくれるだろうと書いてありました。でも、いまはチェルノブイリの子どもたちが私たちにエール

を送っているんですよね、逆に なってしまっているとか・・・。

「原子力 正しい理解で豊かなくらし」桜が満開の双葉町。地震で破壊された後の町に、しだれ桜が咲き誇っていました。

チェルノブイリの30キロ圏には、立ち入り禁止の看板が立っています。放射能マークがこんな形で、日本にも現れるかもしれません。

表土を削ってどれだけ回復できるかという話がありますが、いまはまず進行中のものをストップさせるのが一番です。どこまで被害が広がるのか、誰にもわかりません。第一原発から7キロくらいの所では、警察官はこんな白い服を着て遺体の捜索をしています。見つかった遺体を運んでいました。小さかった のでおそらく子どもだと思います。このあたりは津波で1か月近く放置されていました。放射能が危険で、誰も捜索にも立ち入らなかった場所です。

次に一番恐ろしい状態にあるのが浜岡原発です。砂浜があってそのすぐ上に原発が立っている。しかも遠浅の海です。津波がくる前に波（潮）が引きますが、そうすると取水口は外に表われてしまいます。そして今度津波が押し寄せてくる時には、砂浜の砂と一緒に押し寄せてくるので管のなかには砂がいっぱい たまってしまいます。

そんな危険な状態なのにまだ止めない。中部電力は、津波対策として堤防を作ると言っていますが、それなら、少なくとも堤防を作るまで止めてほしい。なぜそこまで頑なのかわかりません。1号、2号はすでに廃炉となっていますが、4号、5号が運転中で、3号機は定期点検中。6号機を新規で建設するとか言っていますが、おそらく浜岡原発がやられたら日本、東京は直撃されます。浜岡に吹く風は西風が強いので、放射能は東京まで数時間で到達するでしょう。そういう状況です。

※紙面の都合で写真を掲載できませんでした。写真も鮮明な講演のDVDをご希望の方に頒布します。

詳しくは「事務局から」をご覧ください。

12



〔編集部注〕以下の原稿は3月の基金ニュース用に書いていただいたものですが、今回は編集の都合上、休載しました。今、福島原発震災を受けて日本の企業もようやく、サマータイム導入に積極姿勢をみせています。長年取り組んできているヨーロッパを大に見習ってほしい、と思います。しかし、原稿を読むと……



3月に入ってもまだ雪の残るミンスクですが、それなりに気温も上向き、晴れ間の広がる日も増えてきました。何よりも春の近いことを感じさせるのは、いつの間にか随分と日が長くなってきてことです。気温の上ではまだまだ冬への逆戻りであっても、昼間の時間は確実に毎日、少しずつ長くなっているのです。真冬には午後4時台で真っ暗になっていたのが、今では仕事を終えて帰宅する6時台でもまだ完全に暗くはありません。やはり明るい何となく得をしているように感じられ、また朝も目を覚ます時間に暗いのと明るいのとでは気分がだいぶ違います。3月の最終日曜には、10月最終週から半年続いた冬時間が終了し、夏時間（サマータイム）が始まります。時計の針を一時間進めることで、日没が一時間「遅く」なり、一気に日が長くなるという訳です（その分、朝の日の出も一時間遅くなります）。



毎年、季節の交替を強く意識させるこの時計の針を直す儀式ですが、2011年の3月で、冬時間は永遠に終了となるかもしれません。というのも、お隣のロシアでは、今回を最後に、今後は冬時間に移らないことが既に宣言されたからです。この決定を受けて、ウクライナとベラルーシでも、冬時間廃止の是非を検討することになりました。正確には「冬時間」というものは無く、サマータイム以外の通常の時期をこう呼んでいるまでで、「冬時間の廃止」とは、言うてみれば今後はこの季節限定版が年中続く、ということなのです。

そもそもサマータイムは、昼の長い季節に電力などのエネルギーを節約することを主な目的としたもので、ヨーロッパでは全ての国が採用しており、ロシアやベラルーシも毎年、欧州諸国と同じ日に時

計の針を直します。時差ぼけにも縁がない私のような人間には特に支障はないのですが、一時間の時刻変更で、健康状態に深刻な影響の出る場合もあります。毎年夏（または冬）時間への移行後には、循環器系の疾患に伴う救急車の出動回数が増大するほか、睡眠の質が低下し、結果として死亡率が上昇するのだそうです。特に3月の冬時間から夏時間に移る場合には、夜中に時計の針が進むため、一時間寝る時間が少なくなります。影響を少なくするためには、1か月以上前から早寝早起きを心掛けて体を慣らしていくのがよいそうです。



また、肝心の省エネ効果についても、実は余り無いのだという意見が最近では主流です。それよりも、年に2回、全ての時計の時刻を直す手間の方が強調されるようになっていきます。日本でも省エネ効果や明るい時間を利用して余暇を楽しみ、景気活性化にもつながるようという目的で、サマータイム導入が議論されているそうですが、日本人の場合、仕事の開始が早く、なっても結局外が明るい間は残業をしてしまうとか、早く家に帰るとそれだけ各家庭でのエアコン使用が増え、省エネにつながらない、などの意見があります。単に身の回りの時計を直す面倒さだけではなく、今では銀行取引や交通機関の運行など、ありとあらゆる場面で設定された時刻の切り替えをする必要があり、その自動制御装置を導入するコストも相当で、混乱も心配される、という訳です。私の場合、時間の変わる日の夜中にビデオのタイマー録画をするのに、どうセットすればいいのかいつも悩み、しょっちゅう失敗していた記憶があります。

周囲をみる限り、毎年のことなのにいつから時間が切り替わるのか把握していない人が多く、二つある携帯のうち、直していない方の時間を見て大事な約束に遅刻したという人もいました。朝のスタートが遅めのベラルーシ人には、朝が暗くても日没時刻が遅くなる方がいいのかもしれません。最後はいつもの「ツルの一声」で決まるような気がするのですが、どうなりますことやら。

花田朋子：ミンスク在住

現地からの手紙

3/11 の震災・原発事故の後、ベラルーシとウクライナの人々から、多くのお見舞いの手紙が届いています

チェルノブイリ子ども基金と支援者の皆様へ

巨大地震、津波による悲劇的な事件および、福島第一原発の事故発生からほぼ2週間が経過しました。テレビに映し出されるこの悲劇の映像に、私たちは大変ショックを受けました。毎日、涙して日本での事故の状況を気にしながら、皆様に対してお祈りしています。

平穏な人々の生活が、一瞬にして恐怖や苦しみ、死へと変わってしまうものかと信じることができません。また、福島第一原発の爆発も含めこの災害の規模を測り知ることもできません。謹んでお見舞い申し上げます。

日本人の勇敢さと強さには敬意を表します。数千キロ離れていますが、いつもあなたがたの傍にいたいことを忘れないでください。常にあなたがたを思い、お祈りしています。一日でも早く全てが収束することを神様に祈っています。ただ、肉親や近親者を失った人々の心がすぐに癒されることはないかと思います。

私たちは、チェルノブイリ原発事故で被害を受けた子どもたちへのご支援について、心より感謝しています。しかしながら、今日、日本で起こっていることについて、無関心ではられません。どうぞ頑張ってください。私たちはつねにあなたがたと一緒にです！

ベラルーシ 児童健康回復センター「希望21」所長 マクシンスキー・V

2011年3月24日

日本の皆様へ

ウクライナ全国の人々が日本での出来事を固唾を呑んで見守っています。そして日本の皆さんのことを憂い、その悲しみと苦しみが、いかにばかりかと思ひ致しています。チェルノブイリの事故を体験した私たちは、原子力発電所の事故がどのようなものかを、とてもよく理解しています。すでに事故から多くの歳月が過ぎましたが、その被害は今でも続いています。多くの子どもたちが病気になり（甲状腺ガンだけでなく）、環境が破壊され、住民全体（特に子どもたち）の病気への抵抗力がとて

も弱くなり、さらに事故処理に参加した人々が健康を害しています（ある人は亡くなり、ある人は障がいを負っています）。原子力災害は、とても恐ろしいものです。たとえすぐにその被害が感じられなくとも、あとからその正体を現すのです。私は、日本の人々の勇気と冷静さに心動かされています。そして日本で起きている一連の事故が、私たちの国のチェルノブイリのようにならないことを心から願っています。私は、日本の政府には自分の国民を守るよう気を配ることを切にお願いしたいと思います。

日本はとても小さく、とても美しい国です。皆さんの暮らすそのかけがえのない「世界」が原子力やそれを動かす誰かの欲によって損なわれてしまうのは、地球上全ての者にとって途方もない喪失です。日本の人々は、自身の知恵と独創性、その勤勉さを世界中に誇っています。ですから、日本の人々には是非とも最も安全な方法でエネルギーを得る方法を考え出してもらわなければなりません。どうか、その美しさに溢れた土地を、そして皆さんの子どもたちを守って下さい！

ウクライナ・キエフ市 インナ・S

（※インナは15年前に甲状腺ガン手術を行った。2008年に無事女兒を出産。母子ともに健康状態には注意が必要）

広河隆一顧問がウクライナより勲章授与

チェルノブイリ子ども基金の創作者で現在顧問の広河隆一（フォトジャーナリスト、DAYS JAPAN 編集長）がウクライナ大統領より勲章を授与されました。勲章は、長年のチェルノブイリ支援活動に対して授与されました。

「チェルノブイリ原子力発電所の事故処理作業への優れた個人的な貢献、国際人道プロジェクトの実施、長年間社会的活動のため広河隆一様に功労勲章（3等）を授与する」

ウクライナ大統領 ヴィクトル・ヤヌコヴィチ

2011年4月26日

※駐日ウクライナ大使館より、チェルノブイリ被害者への救援活動に対し「チェルノブイリ子ども基金」へ「感謝状」が、またウクライナ非常事態大臣より、チェルノブイリ子ども基金事務局長佐々木真理に「名誉表彰状」が授与されました。



人が住めない大地～チェルノブイリを訪れて～

ピーピーピー。黄色いガイガーカウンター（放射線量測定器）を道路脇の草原にかざすと、けたたましい音を上げた。目の前には、草木が生い茂る大地が続いているだけだ。「この先の放射線量が危険だと言う合図です。決して入らないでくださいね」。ガイドの淡々とした物言いに、逆に寒気を覚えていた。

私は、大学の友人と共に、2010年10月末にウクライナ・チェルノブイリを訪れた。私は、被爆三世である。祖母が長崎で被爆した。幼少期にそのことを聞かされて以来、原爆の問題に興味を持ち続けた。大学生になってからも、長崎で被爆者に会って聞いたことをルポルタージュにまとめた。そうして、放射能の恐ろしさをわかるにつれて、人と原子力エネルギーとは果たして共存可能なものなのか、原発の問題についても考えてみたくなった。その際に、どうしてもチェルノブイリは外せないものだと考えるようになっていった。

チェルノブイリ原発事故。1986年4月26日に起きた史上最悪の原発事故だ。本などを読んで、その被害の深刻さ、放射能の怖さについてはわかってはいるつもりでいた。しかし、内心「20年以上も経っているのだから、放射能に汚染されている地域は、ごくごく限られたものになっているんじゃないだろうか」と高をくくっていた。

ピーピーピー。相変わらず鳴り響く轟音が、私のその一縷の望みを無残にも打ち砕いた。目の前には、うっそうと草木が生い茂っている。奥に広がる平野には、のんきに走っている鹿が、少しだけ見えた。春になれば、この大地を花が飾るのだろう。だけれども、私たちは草原に足を踏み入れることはできない。まるで通せん坊をするかのように、放射線汚染地域を示す黄色い標識が、立ちふさがっていたから。

20年以上前に起きた事故にも関わらず、いまだに30キロ圏内は、居住はおろか、立ち入りさえ制限されている。しかし、そんな30キロ圏内で、私たちは多くの人と出会った。事故を起こした4号炉付近をジャンパー1枚だけ羽織って歩く作業員。売店で、作業員に笑顔を振りまきながら、煙草を売る店員。圏内には、多くの猫もいた。やたら人懐っこい。

その中でも、何より印象深いのが、サマショールとの出会いだ。サマショールとは「身勝手な人たち」を意味する言葉で、本来、居住を禁じられている30キロ圏内に、無断で住んでいる人たちのことだ。私たちが出会ったのは、放射能に汚染された地域に住む、ひとりの老女だった。深いしわを刻んだ顔は、私たちを満面の笑みで迎えた。部屋の中は、きれいな花柄で彩られている。一人で住んでいるという。「なぜ、ここに住んでいるかって？ここが私の生まれ育ったところだよ。住むのが当たり前じゃないか。怖いもんか。私は、裏の森で採れたクルミも、キノコも食べているよ。孫が遊びに来たときには、息子夫婦や孫も一緒に食べている。それでも大丈夫さ」。そう力強く話すのとは裏腹に、話す合間に、ゼーゼー息を整えている。心臓が悪いそうで、今でも首都・キエフへの検診が欠かせない。話を聞きながら、私たちはウォッカで乾杯をした。一気にウォッカを流し込むと、胸と腹がじわじわと熱くなる。最後には記念写真も撮った。「ぜひ送ってください。また遊びにきてね」。最後まで、老女は満面の笑みで私たちを見送っていた…。

帰路、キエフに向かう車中で、私は考えていた。目には見えない放射能の恐怖、汚染された大地で笑顔を振りまく人々、その人々の体がジワジワと蝕まれていく残酷さ…。30キロ圏内を回って見たこと、聞いたことが、いくつも頭の中で回り始めた。原発は確かに便利だ。私たちも、その恩恵にあずかっている。しかし、一度、事故を起こせば、大地を人の住めない土地にしてしまう。人々の体を蝕んでしまう…。確かに、いま全ての原発を止めることなどできないのかもしれない。しかし、これからのエネルギーのあり方を、そもそも電気を浪費し尽くしている生活そのものを考え直さなくてはいけないのではないか。チェルノブイリの放射能におかされた大地が、その疑問を投げかけているような気がした。車の外はもう夜。遠くには、キエフの町のキラキラと輝くネオンが、ぼんやりと見え始めていた。

（中央大学3年 K）

（※Kさんは昨年10月、チェルノブイリ子ども基金の報告会に参加し、その後チェルノブイリ原発を訪問されました）

=====*

2月8、9 日筑波大学で行われた「チェルノブイリ写真展」来場者の声【筑波大学学生支援プロジェクト T-ACT 主催、ロシア語を学ぶ学生たちが主体となり企画】

=====*

■医療にかかわる人間として若い命が失われていくこととてもショックを受けた。自分に何ができるか考えてみたいと思う。(医学類 3 年) ■原子力発電が他の発電に比して、非常に効率的で環境的であると聞いていたが、危険と隣り合わせであることを感じた。25 年を経ても放射能は消えず、それ以後生まれてくる子どもたちに否応なく被害を与えている。

(大学院・教育研究科 1 年)

■教科書に出ていたチェルノブイリの被害は、ほんの 1、2 行の説明のみで、こういう現実を自分は今まで全く知らずにいました。被害がどのくらい続いていくのか見当もつきません。私たちは今原子力発電所のおかげで快適な生活を送っていますが、その生活が大変危ういもののうえに成立しているのだと痛感しました。

(社会学類 1 年)

■原発事故が 25 年も前のことでありながら、今でも犠牲者が出ており、苦しんでいる人たちがいることをここで初めて知りました。事故の傷跡の深さを知るとともに、原発を作り続けている日本にとっても他人事と思えない。老化の進んだ村で、十字架を痛ましい表情で抱く老人の写真が印象的であった。(物理学類 1 年)

■写真展を見てとても衝撃を受けました。写真の向こうの人々の姿は、歴史にはなっていない。未だ、ずっと苦しんでいる。彼らを救済すること、そして繰り返さないようにすること。これは絶対にしなければいけないことだと思った。(比文 3 年)

=====*

4月14～26 早稲田奉仕園スコットホールギャラリー
「チェルノブイリ・フクシマ写真展」来場者の声

=====*

■写真の重さを感じました。やはり人間には核、原子力など扱いきれないのは明白だ。地球の未来を考えるなら自然との折り合いのとれた方法を探していかなければならない。

(50 代 女性)

■本日は来て本当に良かった。言葉をこえて命にひびきました。かなしみと怒りと、そして勇気をいただきました。原発 NO と言いつける勇気を。(50 代 女性)

■自分も見捨ててきたのだ…と痛みが走ります。福島で真剣になりました。これから子ども達の未来のために二度とあってはならないことと思います。(60 代 女性)

■福島がきっかけで原子力に興味を持ちましたが、最悪の人災の可能性のあるものを「安全」という東電、国に対してとても不満です。早く浜岡原発をとめないと今以上大変なことが起こると思いました。(20 代 男性)

■福島原発(2011.3.11)、日本列島 3 度目、広島、長崎に次いで何とも残念なこと。チェルノブイリ、スリーマイルの経験があったのにも拘らず、「想定外」を強調する人々は今後どうするつもりなのでしょう？地震列島の日本にはいかなる科学技術をもってしても原発はムリ。自然エネルギーの道を探る以外には…せめてチェルノブイリはどうだったのか知りたくて参りました。

(70 代 女性)

■この写真展開催を東電、保安院、与党をはじめとした政治家にみせるべきです！またいろいろ喋ってる学者にも。

(40 代)

■今までチェルノブイリの問題、原発の問題に対してあまり意識しておりませんでした。しかし今福島でおきてしまったことを見て本当にショックを受けています。避難させられている方々はどうなるのか、原発周辺の土地はどうなるのか、原発自体をどうするのか、東電の電気を使っている私は加害者です。福島を少しでも被害を食い止めるため何ができるでしょうか…

(30 代 男性)

■立ち入り禁止の区域に自主的に住んでいる人々が印象的でした。危険だと分かっている、不安を抱きながら住みなれた地に暮らすことを望む人々。フクシマ県民の方々もきっとそうだと思います。広河さんの半生をかけた写真たちが、とても貴重なものを感じました。これからも撮り続けていただきたいし、見せていただく私たちももっとサポートしていけたらと思います。ありがとうございました。(20 代 女性)

■今まであまりよく考えずにきたので、申し訳ない気持ちでいっぱいです。原子力の問題を自分の問題として考えていこうと思います。私にも 4 歳の子がいるので非常につらいです。(40 代)

■写真を見ているうちに福島の写真が出てきて驚くとともにチェルノブイリ写真と並んでいることに対する違和感のなさにゾッとしました。早急な子どもたちの避難を切に願います。展示ありがとうございました。(20 代 男性)

=====*

423 笹岡区民ホールで行われた「広河隆一講演会 & チャリティコンサート」会場でのアンケートは 3 ページをご覧ください。写真展のアンケート、423 イベントのアンケート共に全文は、当基金のサイトに掲載しています。



黒部ドクターのお話



1. 子どもへの放射線の影響

①子どもは成人よりも、放射線による影響が大きいのです。子どもの放射線に対する感受性は成人の約10倍です。その理由は、細胞分裂が盛んであること。特に胎児、乳児に盛んです（急速に成長するからです）。次に、生存期待年数が長いことです。また、女兒は男児より感受性が高い。その理由は、卵母細胞を生まれた時から持っているからではないでしょうか。②外部被ばく線量が同じである場合、成人より子どもの方が、皮下組織などが少なく、内部臓器に達する線量が高く、その臓器の吸収線量が多くなります。③その結果、放射線による生物学的影響が、子どもの方が大きいのです。生物学的影響（変化）とは、細胞機能の低下、細胞分裂の遅延、染色体の異常、細胞の死などです。

2. 微量放射線のリスク

微量放射線でも、すべての臓器の発がん、機能の異常を引き起こしますが、機能の異常は形態の異常を伴う発がんのように、数値的にとらえにくいので、放射線被ばくによる有害な影響の発生確率（頻度）を、発がんのリスクとして表現しています。私の病原環境論から言うと、この確率は、環境要因によって左右されます。

3. 発がんのリスク

①子どもは発がんのリスクが大きい（前述の理由から）。そして被ばくした時の年齢が低い程大きくなります（同）。胎児が被ばくした場合は、被ばく後1年以内に、白血病、甲状腺がんをはじめとする各種のがんが現れます。乳幼児期の白血病とがんは3年以内から始まります。ただし、すべての子どもではなく、確率的に出ます。②すべての臓器のがんが放射線により誘発される可能性があります。③成人の胃、肺、結腸のがんは、白血病の発生よりリスクが高く、乳がんは低い。成人のがんは10年後から増え始めますが、白血病は成人でも被ばく後3年で現れ始めます。

4. 免疫の仕組み

放射線による害は、ダイオキシンを始めすべての発がん物質と同じであり、体内の細胞の染色体を

切断し、中にあるDNAを切断します。自然にもその切断や細胞分裂の際の間違いが生じていて、それを修復する免疫のシステムがありますから、大部分は修復されるか、されずにできた細胞はリンパ球によって破壊されますが、それが多数あるか、修復や破壊の免疫のシステムが働かないと間違いのある細胞が生き残り、発がんに代表される健康上の問題が生じます。免疫の働きを低下させるのが、現代では主に環境要因特にストレスと言われています。だから、発生する確率は社会的弱者やストレスの多い人に高くなります。がんは「がん性格」という本によると、じっと我慢している人がなりやすく、くよくよしない人になりにくいと言います。明るく楽しく人生を過ごしましょう。神経質にならず、しかし、きちんと防御しましょう。

5. 放射線はできるだけ浴びない

できるだけ浴びない、に越したことはありませんが、3原則は「時間（短く）」「距離（遠くへ）」「遮蔽（汚染の防止）」です。外部被ばくは、水で洗い流します。内部被ばくは、汚染された食品類を摂らないことです。

6. 個人により影響は異なる

原爆被爆者でも、まだ元気に生きている人がいます。チェルノブイリの経験では、子どもは圧倒的に社会的弱者に多く、高齢者は転地もストレスになります。内部被ばくしても、自然に体外へ排泄される仕組みもあり、今回母乳汚染が見つかった人に、食べるものを注意するようにさせたら、再検査では検出限界値以下になりました。

7. 「未来の福島こども基金」

広河さんを中心に「未来の福島こども基金」を作り、他団体と共同で「市民放射能測定所」の設立の準備をしています。口座名は「チェルノブイリから日本を考える会」です。

黒部信一：埼玉県新座市堀之内病院 小児科医師
黒部信一のブログ <http://kurobe-shin.no-blog.jp/>

6・11 アクション 広島原爆ドーム前で うのさえこ(福島ヒロアクション)

福島原発震災が起きて3か月が経ちました。

この3か月、全ての人が、ひとりひとり、懸命に生きてきました。

目を凝らしましょう。

見えない放射能に。4月5日までに放出された放射性物質は77万テラベクレル。チェルノブイリ事故の3分の1、広島原爆約200個分の放射性物質が環境中に解放たれてしまいました。そして毎日、空へ、海へ、大地へ、大量の放射能が流れ出ています。それは生き物に入り込み、蓄積しています。

目を凝らしましょう。

今、生命を削りながら必死の作業を続けている人たちがいます。年間被曝限度はこれまでの5倍に引き上げられました。線量計も足りず、内部被曝の検査もされず、大量の被曝を強いられ、恐怖と疲労の中で、私たち社会の命運を賭けて働く人たち。愛する息子が今日も原発復旧作業のために家を出て行くのを、たまらない気持ちで見送る母親がいます。

目を凝らしましょう。

今、たくさんの人々が、被曝を強いられて生活しています。チェルノブイリ事故後、強制避難区域となった地域と同じレベルの汚染地域で、人々が普通の暮らしをするようにと求められています。赤ん坊も、子どもたちも、放射線を浴び、放射性物質を吸い、飲み込み、暮らしています。学校に子どもを送り出した後、罪の意識にさいなまれ、涙を流す母親がいます。大人たちは、子どもたちを守るための方法を必死に探しています。年間20ミリシーベルトという途方もない値。親達は教育委員会にも行き、県にも市町村にも、そして厚労省にも行き、不安を訴え、子ども達が被曝から守られることを

求めました。自ら放射線量を測り、校庭や園庭を除染しました。防護のための勉強会を開きました。給食は安全なのか、プール掃除は、夏の暑さ対策は、これまでの内部被曝量は・・・考え付く限りのことをやっています。子どもを疎開させた親もいます。情報が錯綜する中、家族の中に、地域の中に、衝突や不和が生じています。

耳を澄ましましょう。

赤ん坊の寝息、こどもたちの笑い声に。この世界を信頼し、裸で産まれてくる赤ちゃん、世界の全てを吸収して日々成長する子どもたち。私たち大人はそれにどう応えるのでしょうか。

耳を澄ましましょう。

木々のざわめき、かぐわしい花に集まる虫たち、海を泳ぐ魚たち、山や森に暮らす動物たち・・・生きとし生けるもの全ての声に。

耳を澄ましましょう。

まだ生まれぬ生命たちのささやきに。私たちの生命が希望を託すこの小さな声たちがなんと言っているのか、聞き取れるでしょうか。

耳を澄ましましょう。

生きている地球の鼓動に。私たちは、動く大地のうえに街を建て、一瞬の生命をつないで生きてきました。次の巨大地震はいつ、どこに来るのでしょうか。

耳を澄ましましょう。

自分の心の声に。

私たちの故郷は汚されました。

もう二度と、3月11日以前に戻ることはありません。海にも空にも大地にも、放射能は降り注ぎました。

私たちは涙を止めることはありません。こんなに悲しいことが起きたのですから。心から泣き、嘆き、悔やみ、悼みます。

私たちは涙を恐れません。

私たちが恐れるのは、嘘です。幻想の上に街を再建することです。人々が被曝し続けることです。そして声なき無実の生命たちの未来が、失われていくことです。

私たちは変化を恐れません。

恐れるのは、悲劇を直視せず、悲劇を生み出した社会に固執し続けることです。大きなもの、効率、競争、経済的利益、便利さ・・・そうしたものを、私たちは問い直します。科学も数字も全て、私たちの生命のために奉仕するべきであって、逆ではありません。

私たちは、別のあり方を求めます。無数のいのちの網目の中で生きる、私たち人間のいのちを守る、別の価値観と社会を求めます。

私たちの中の「原発」に、私たちは気づいています。私たちはそれを、乗り越えていきます。

私たちは声をあげ続けます。

私たちは、行動し続けます。

人間性への深い信頼を抱き、限界なく、つながり続けます。

再び、目を凝らしましょう。未来の世界に。人々が放射能におびえることなく、被曝を強いられることもなく、地球という自然に調和しつつましく豊かに暮らす世界の姿に。

今日皆さんと歩む一步一步の先に、そうした未来があると信じています。

2011年6月11日
ヒロアクション福島原発40年
実行委員会 委員長



募金・救援状況



●募金状況 2011年3月～5月

	3月	4月	5月
募金件数	191件	342件	111件
救援寄付金	1,246,071	1,997,150	401,305
保養費	56,200	53,000	37,500
特別保養費	105,000	205,000	35,000
里子支援	157,110	114,770	138,540
4月イベント賛同金	41,000	65,000	8,000
医療機器支援	58,000	168,000	27,000
特別保養賛同金	5,000	-	-
通信費	43,000	108,000	38,000
東日本大震災支援	230,000	291,000	96,000
合計(円)	1,941,381	3,001,920	781,345

※他に現物寄付(切手) 10,660円、ベルマーク

●救援状況 2011年3月～5月

(単位:円)

<ウクライナ>

◎子どもたちの生存

特別保養費 985,664
里子支援 11人(11.1～6月分) 278,256

<ベラルーシ>

◎希望 21

特別保養費(家族の保養、子どもたちの保養) 970,119

◎困難の中子どもたちへ希望を

里子支援4人(11.4～9月分) 99,228
奨学生支援 5人 124,035
緊急支援4人 99,228
保養費(交通費往路分) 53,937
運営費(スタッフ給料半年分、車修理費) 177,072

◎チェルノブイリのサイン

里子支援11人(11.1～6月、4～9月分) 248,940
運営費(スタッフ給料4ヵ月分) 39,830
医薬品 33,192

♥ 募金団体名一覧 ♥

紙面の都合上、個人名は省略させていただきます。ご寄付をいただいたみなさまに心より感謝申し上げます。(順不同・敬称略)

【3月】実教出版放射能倶楽部/TMヨオガ楽園/(株)音楽センター/WE21 ジャパンおだわら/ウィリアムス神学館学生会/千葉友の会/日本キリスト教団 片倉教会教会学校/(株)ジョイメイト/日本山妙法寺/北陸学院中学校/広河隆一非核・平和写真展開催を支援する会

【4月】日本基督教団弓町本郷教会女性の会/ACT21/西小岩幼稚園/ケイ歯科クリニック/安西メディカル株式会社/ろばや/(株)ジョイメイト/ピースライブ イン こうち/東京平和運動センター/自治労東京都本部/小池音楽教室/自然環境センター/創価学会 男子部/新津自然食品センター/(株)桜井書店/養源寺/日本キリスト教会横浜長老教会

【5月】トランスフェリックマネジメント/広河隆一非核・平和写真展開催を支援する会/(株)ジョイメイト/福島原発事故を考える会/伊勢市国際交流協会 5/17 学習会

チェルノブイリ 25 周年救援キャンペーン 現地報告&チャリティコンサート・写真展

募金額 1,356,354 円※

多くの方にご参加・ご協力いただきこのような収益をあげることができました。みなさまにお礼申し上げます。

・チェルノブイリの支援へ 813,812 円

・東日本大震災の支援へ 542,542 円

収益は以上のようにさせていただきました。

※救援企画 in 名古屋実行委からの募金 35 万円含む

チェルノブイリ25周年救援キャンペーン 収支報告			
収入		支出	
チケット	849,800	現地報告&コンサート	
賛同金	261,000	会場費	147,800
会場募金	136,151	舞台費	84,150
物販益	255,282	写真展	
写真展募金	112,383	会場費	90,000
		パナル送料・駐車代	79,760
東京イベント		共通経費	
		交通費	3,980
		印刷費	125,677
		発送費	50,640
		事務費	26,255
小計	1,614,616	小計	608,262
		収益(募金)	1,006,354
合計	1,614,616	合計	1,614,616

各地の救援イベントからの募金

♥チェルノブイリ 25 周年救援企画 in 名古屋実行委員会 350,000 円

♥ノーモアチェルノブイリ関西のつどい* 70,000 円
*一般募金に組み込みました。

東日本大震災支援募金

・震災限定振込募金 54 件 617,000 円

・25 周年イベント収益から 542,542 円

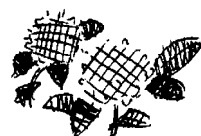
合計 1,159,542 円を下記の三団体へそれぞれ 386,514 円ずつ寄付いたしました。

♥チェルノブイリ子ども基金あいづ

♥チェルノブイリ子ども基金奥羽

♥未来の福島こども基金*

*チェルノブイリ子ども基金ほかの有志で結成されました。詳しくは同封のチラシをご覧ください。今後、当基金の姉妹団体として活動します。どうぞ、ご協力よろしくお願いいたします。



事務局から

■ボランティア募集

◎事務局では、毎月第 1・3 土曜日の午後 1 時半～5 時半、ボランティアの方に事務作業などを手伝っていただいています。

◎ニュース発送作業（年 4 回：3・6・9・12 月）

次回 9/17（土）午後 1 時～4 時ごろまで 東京ボランティア市民活動センター（飯田橋駅ビル セントラルプラザ 10 階）。少しの時間でも歓迎です。

＊ボランティア参加希望の方は、日程が変更になる場合もありますので前日までにご連絡ください。

【問い】平日午前 10 時～午後 5 時半 留守の場合は伝言をお願いします。T&F 03-5228-2680

■「基金ニュース」について

募金をくださった方には、使途の報告を兼ねた“ニュース”を原則 1 年間お送りしています。また、ニュース購読費（2,000 円/年）も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。

★広河隆一著『暴走する原発』

小学館発行 1,365 円

いまこの時期にこそ、多くのみなさまに読んでいただきたい本です。今回特別に送料込の価格でおわけします。当基金から購入いただくと代金の一部が募金になります。

☆DVD 4・23 救援イベントより

広河隆一最新現地報告

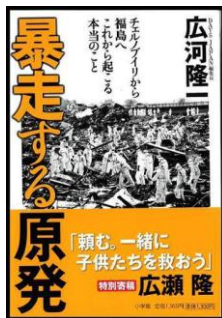
約 50 分 頒布価格 800 円 送料 100 円

★テレビ番組の紹介 6/26（日）深夜 1:20～

大阪毎日放送制作「映像 11～その日のあとで～」(仮題)

チェルノブイリ子ども基金の活動が紹介されます。

ベラルーシのサナトリウム「希望 21」を取材・撮影しています。関西方面の方は番組を確認の上、ご覧ください。



未来に安心なエネルギーを！



すべての方に振込用紙を同封しております

事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

住所変更の方はお知らせください

新旧両方の住所を、葉書・FAX・Eメールまたは払込票の通信欄にてご連絡ください。また、通信が二重に届いている場合、ご家族で連名による一通送付でもよい場合なども同様にお知らせください。

払込取扱票のお名前・ご住所は

楷書でわかりやすくご記入ください

郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

「受領確認の葉書」をご希望の方へ

通信費・寄付金を納入された方で、受領確認の連絡をご希望の方には、葉書(金額は記載せず)をお送りします。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

「領収証」が必要な方へ

郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる領収証です。大切に保管ください。別途領収書がご入り用の際はお申し出ください。

●ご不明な点がございましたら問い合わせください。

第 5 期理事会 2011 年 4 月～2013 年 3 月

代表理事 向井雪子

理事 大戸清一 小寺隆幸 佐々木真理

齋藤武光 鈴木稔 中務俊之

監事 清水玲子 鈴木由利子

顧問 黒部信一 広河隆一

上記のような体制になりました。

＊・＊

福島原発震災が起き、チェルノブイリ支援活動は今後どうするのか？当面は姉妹団体と協力しあい、長年のチェルノブイリ支援活動を生かした、福島の子どもたちへの支援を模索しながら進めていく所存です。引き続きご支援をよろしくお願いいたします。

●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年 4 回発行●

〒162-0816 東京都新宿区白銀町 25 メゾンド原 207 号室 Tel/Fax 03-5228-2680

ウェブサイト＝<http://www.smn.co.jp/chno/index.html> e-mail: chno1986@tokyo.email.ne.jp

事務局ブログ ◇神楽坂事務局だより <http://blog.goo.ne.jp/chno1986jimukyoku/>

※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。

チェルノブイリ関連情報、福島原発震災関連情報、随時ウェブ・ブログで更新中